

# 魚まち通信

発行責任者 魚まち歩観会  
会長 中井 孝佳

- 魚まち新聞目次・・・
- ・トピック
- ・魚まち紹介
- ・魚まちあの人、この人
- ・連載<道の思い出>
- ・魚まち郷土資料館
- ・名所を歩く
- ・ながしま弁で遊んでみたら？
- ・魚まち語録
- ・昔ながらの漁法・漁具
- ・味自慢
- ・歩観会の活動経過



安土桃山時代(1573年~1624年)京都伏見で作られた形や彩色の素朴な土製の人形。

## 参加者募集

魚まち歩観会では、町づくりを応援してくださる方を募集しています。興味のある方は、紀北町役場紀伊長島産業振興課 7-1111まで ※裏面にこれまでの活動状況や会の紹介をしています。

# 長島港の灯台、大移動

## まちのシンボル移動

### 「白灯台」

漁民には馴染みのある、長島港の白灯台が2月に引越した。重さは76トン・高さは11メートルを誇る建造物で、1992年(平成4年)に立て替えた物を再利用した。



時の様子が堤防の上から撮影した8mmフィルムに残されている。

また長島港の灯台といえば記憶に残るのは「つきだし」の赤灯台である。この赤灯台と区別するために今回移動した灯台は白灯台と呼ばれるようになった。

浮き灯台は台風の高波で、アンカーが外れ河口に流れついた経緯もあるが世代交代しながら今も波間に浮かぶ。

これら灯台は漁船の安全を願ってこれから見守り続けてくれるだろう。

引越した白灯台は海上からクレーンで約50メートル移動。堤防が陸続きでないことから、今後は太陽光発電の発光ダイオード(LED)によって光が発せられる。

白灯台といえば昭和34年にチリ地震津波が長島を襲った際、多くの町民は山へ避難。沖をみていると、潮が大きく引き、あついで間に押し寄せ、白灯台を飲み込んでいったという。その

## 魚まちマップ完成

日本語版4万部、英語版1万部



3月末魚まちマップが完成した。このマップは、古道客や観光客を西長島の町なかに誘導し「かつてのにぎわいをとりもどすこと」を目的に昨年の6月から20回以上会議を重ね、多方面の方の意見を参考にしながらボランティアの手によって作成されたもの。県から半分の補助を受け、町が80万円の予算で印刷。



特徴は地図上の番号と町内に設置された陶板の番号が同じなので、すぐに自分の居場所がわかるようになった。また裏面には史跡紹介・民話・郷土料理・味じまん四季暦・体験メニューなど住民にも興味深い内容が掲載されている。

## 魚まち陶板を62カ所に設置



町外から訪れた人が道に迷わないようにマンボウの陶板が街角に取り付けられた。地図と同じ番号・町名・読み方が表示されている。(陶板はマンドロ陶芸教室の原英郎さんと有志が作り、西長島自治会の協力のもと取り付けられた)

## 魚まちあの人、この人

### 浜のおっちゃんのたまり場

江ノ浦橋の近く、港町の前の堤防を浜に抜けると、浜のおっちゃんたちのたまり場がある。鉄管の骨組みに、トタン屋根の小屋には、みんなが持ち寄った腰掛が置いてあって、気軽に誰でも立ち寄って雑談ができる。

もともとは、旧魚市場の屋根の下に集まっていたのだが、新しい堤防の工事計画で一時、存続の危機に見舞われた。しかし堤防完成後、長島漁協に頼んだところ天候の悪い日など漁に出る前の相談場として今の小屋を建ててくれたので、復活することができた。

漁師を引退したおっちゃんから、現役漁師、将棋を打ちに遠くからやって来る人、通りがかりの人など様々な人が集まる。冬には、暖をとるためにドラム缶にたきぎをくべる。たきぎは製材所に



## 道の思い出 (植村 岐穂子)

私が小学生のころ、家の前は未舗装の道路でした。まだ白動車が珍しかった頃です、ダツトソクが通るたび表に出て行つてながめました。車を通つた後は土煙がもうもうと立ちます。▼そんなある日、浜近くに小石がたくさん積まれているのを見つければ、家へかけこみ、そのわけを聞くと、道がアスファルトになるということでした。工事が始まるとまたたく間に上の道は上部が削りとりられ、そこに小石が敷き詰められました。石はこの辺では見たことのない緑色の石で、近所の子供たちの興味の対象になりました。▼兄が、水品がついたにぎりこぶしほどの石をみつめました。他にも、金色や銀色に光る結晶のついた石を見つけ、私たちは本物の金や銀の原石だと思つて大喜びしました。その数日間、幸せの絶頂でした。どうして大人は気がつかないのかしらと不思議に思つたほどです。でも幸せは続きません。ある日父が、誰に聞いたのかその石は黄鉄鉱と黄銅鉱で珍しくもなんともない石だと私たちに教えてくれました。とたんにその金色が色あせた気がしました。▼まもなく、石はコールドタンに埋もれ、アスファルトのすばらしい道が出来上がりました。拾った石はすてられることなくしまつてありましたが、いつか忘れられ消えていきました。